



流水文の銅鐸・岡山県高塚遺跡  
岡山県古代吉備文化財センター

## かわはく No.2

### CONTENTS

川の思い出 館長 新井 千行	2
川をめぐることば 一川と沢	2
かわはく日誌	3
ミュージアムグッズの紹介 (2)	3
万国博覧会とサケの人口ふ化事業	4
！これ、なーんだ？	5
特別展“鉄砲堰ってなんだ”その後	6
プレイリーダー紹介Ⅱ	7
教育普及活動のご案内 一楽しくて、ためになる川博一	8



# 川の思い出

館長 新井 千行

さいたま川の博物館が昨年開館特別記念展として、写真展「記憶の中の川遊び―園部澄の残した日本―」を実施した。昭和 20 ～ 30 年代にかけての日本の諸河川において普段に見受けられた川遊びの日常的な光景を紹介したものであった。同年代に少年時代を過ごした私にとって、どの写真を見ても自分たちが遊んだ川のようにあつたり、被写体の中の人物が自分かなと思うような写真ばかりでなつかしく感じた。

私たちが遊んだ川は荒川から水を引く農業用水路である。四季を通じてよく遊んだ。春から秋にかけては、魚取りや水浴びであり、冬は氷滑りである。魚取りは時々近所の子どもが集まって草や土を使って川に堰を作り水をバケツでかい出すと魚が手づかみで取れた。取れた魚は山分けにした。どの遊びも異年齢集団で、年長組が遊びの指揮をとっていた。

家の手伝いもよくした。田植えの時期になると、荒川からの水量も多くなり、農業用水路も水かさが増す。田圃へは自然に水が入るが、水位より高い田圃には、バケツやスイコウという道具で水を汲み上げるのだが、広い田圃はなかなかいっぱいにならない。時間もかかるし、重労働であった。

農業用水路には、牛、馬を洗う場所が作られていて、田仕事を終えたあと牛を川に入れて洗うのであるが、牛を川に引き入れるのになかなか苦勞する。無理やり川に入れようとすると、尻尾で叩かれたり、鼻先で川の中へ突き飛ばされたこともある。苛立ちとくやしきで牛を何度も叩いたことがあった。

最近、子どもの頃遊んだ川に行ってみた。子どもの遊ぶ姿はなく、見渡す限り緑のジュータンをひきつめたような田圃のきれいな風景は昔のままであったが、農道は整備され、車の往来が多く、空き瓶、空き缶が道端や川の中まで転がっていて、子どものころ裸足で遊んだ川は変わっていた。裸足で遊べるような安全で、ごみのないきれいな川にしたいものです。

## 川をめぐることば

### ―川と沢―

川と沢の違いを聞かれて、すぐに答えられる人は少ないと思います。私たちがすぐに思い浮かぶのは、沢は「兩岸から植物が生い茂って薄暗い。また川幅が狭く、浅い」というものです。

しかし、連続している川をどうやって区別しているのでしょうか。事典を調べてもその様子は書いてあるのですが、はっきりしません。建設省国土地理院へ問い合わせても明確な回答を得ることができませんでした。どうも慣習的な言葉のようです。

ところで、調べていくうちにおもしろいことがわかりました。“A沢”と「沢」を使っている地域と、“B谷”と「谷」を使っている地域があるということです。実は、「およそ、糸魚川―静岡線を境にして西の地域は谷、東の地域では沢を慣習的に使用している。だから、関西には沢がない。(山と溪谷社)」ということです。



## 1 特別展

■第3回特別展 3月28日～5月5日 (32人)

「鉄砲堰ってなんだ」

(1) ワークショップ「鉄砲堰を語ろう」

(2) 講演会「水源の村から～山地の仕事と暮らし」

講師：小林 茂氏（県文化財保護審議会委員）（71人）

なお、特別展の図録はコパンで取り扱っています。

## 2 土曜おもしろ博物館

■砂鉄でアート 4月11日 (64人)

■川辺の植物パウチッコ 5月9日 (58人)

■ベーゴマにチャレンジ 6月13日 (145人)

■ささ舟をつくろう 7月11日 (72人)

## 3 シネマかわはく（映画会）

■第1回4月19日「ライン川と人々の生活」 (44人)

■第2回5月17日「バクの川」 (45人)

■第3回6月21日「三ねん寝太郎」 (130人)

## 4 カワシロウ講座

■「荒川上流の溪畔林（自然）」

講師：崎尾 均氏（林業試験場）(28人)

## ・・・ついに来館者 30 万人達成！・・・

さいたま川の博物館への来館者が開館1周年を目前にした7月11日に30万人目を迎えました。30万人目は、川越市在住の大蔵春菜ちゃん(小学校4年生)です。2度目の来館で、親子3人でいらっしました。

「30万人目でびっくりしました。また遠足で来るのが楽しみです。」と話してくれました。

開館以来、老若男女を問わずたくさんの方が「かわはく」へおいでいただきました。参加体験型博物館として、これからの新しいタイプの博物館をリードしていきたいと思ひます。





## ミュージアムグッズの紹介 (2)

アドベンチャーシアター「荒川ささ舟の冒険」は、荒川の源流から葛西臨海公園までささ舟に乗って荒川下りが楽しめる人気の施設です。この映像で流れる音楽をCDに収めました。

演奏は、シンフォニーです。

この音楽は、「トンビにくわえられて玉淀ダムを越えるところだ!」というように場面が眼の前に浮かんでくるようです。

値段 1,500 円 (税別) でコパンで販売しています。

新作ライン川 1320 kmの旅の音楽の制作を行う予定です。こちらもお楽しみに!



## !これ、なーんだ?

みなさん、この字を見たことがありますか?  
何という字で、どこにあるでしょうか。

この見慣れない字は、草書体の漢字で「みず」という字です。東秩父の精米水車のかやぶき屋根と本館第一展示室の水塚の扉に書いてあります。人々から恐れられていた火災に遭わないことを願って水という文字を書いたわけです。





～特別展みちくさ点描～

## 万国博覧会とサケの人工ふ化事業

### はじめに

平成10年7月18日～8月30日の期間、平成10年度第1回特別展「川の旅びと・鮭」を開催した。この特別展を準備している過程で、サケ・マスの人工ふ化事業に先鞭をつけた関沢明清なる人物の存在を知り得た。そこで、ここでは関沢明清を軸に、明治9年を嚆矢とするサケ・マスの人工孵化事業の顛末と博覧会の果たした役割を簡単に紹介する。

### 関沢明清と万国博覧会

1873（明治6）年のウィーン万国博覧会に関沢明清が参加していなければ、明治9年に開始されたサケ・マス人工ふ化事業は、その黎明に今少しの刻を要したのではないかとさえ思う。

関沢明清と万国博覧会との出会いには、運命的なものを感じさせる何かがある。

関沢明清は、1843（天保14）年、加賀百万石の城下町金沢で生まれる。父親の安左衛門は二百五十石取りの加賀藩士であった。周囲の人々は「邪心のない、好人物。卓越した洞察力に基づく行動は、軽捷で俊敏。奇才」であったと語っている。水産界のパイオニアとして評価される明清の業績にもこの父親の徳性を十二分に垣間見ることができる。一方で、「仕事に没頭するあまり、他人の下駄を間違えるのも常」といった粗忽な面も持ち合わせていたようである。この点でも好人物と評された父親の性格を受け継いだような話である。

さて、ウィーン万国博覧会に明治政府派遣団の一級事務官として参加した関沢明清には、博覧会の展示業務以外に、文明開化を推進するための大きな任務として「貿易に関する調査」が与えられていた。関沢は、博覧会のパビリオンの一つであったスエーデン・ノルウエー漁業館で水産加工品を目に止め、同時にこれらの輸出収益の膨大なことに驚かされた。さらに驚いたことに次に訪れたオーストリア農業館にはサケの成長過程の標本が展示されていた。今日の我々がみると一見何でもない光景のアルコール漬け標本を見て、関沢が驚いたのには訳がある。金沢生まれの関沢は、犀川を上ってくるサケを知っていた。子供の時の体験は、卵やふ化直後の稚魚ならともかく、順次大きくなった稚魚をとることの不可能に近いことを瞬時に理解させた。この疑問が、関沢にサケの人工ふ化技術の存在を知らしめることになる。しかし、この時点では事情があって技術の修得までには至っていない。

関沢は、1876（明治9）年に開催されたフィラデルフィア博覧会に事務官として再び参加した。関沢は、天与の好機を逃さずサケ・マスの人工ふ化技術を会得するとともに、カナダ産のサケの缶詰に注目し、日本における水産業興隆の端緒を掴んだ。

## 人工ふ化事業の開始

関沢が帰国したのは、12月26日である。約1カ月前の11月下旬には茨城県那珂川で鮭が捕獲され受精卵を得ていた。一刻の猶予もならぬといった関沢の人工ふ化事業に対する並々ならぬ思い入れと、父親譲りの奔走振りを窺うことができる。捕らえた鮭の受精卵は大里郡押切村（現大里郡江南町）の養魚場において養殖し、1877（明治10）年4月29日体長約6cm以上に成長した稚魚1万2千尾を荒川に放流した。ついで、5月11日と23日には内藤新宿（現東京都新宿区）の勸農局試験場の稚魚2千5百尾も多摩川に放流された。数量的な比率からすれば、この歴史的なサケの稚魚の放流は荒川が中心であったといえよう。しかし、翌1878（明治11）年の放流総数二十余万尾からすれば、本格的な人工ふ化・放流事業の開始にはまだ1年間を要したと言い換えることもできる。

なお、1878（明治11）年の那珂川下流で捕獲・採卵されたサケの受精卵のうち、押切村には3万5千粒、埼玉県下新座郡白子村（現、和光市白子）には3万9千粒、神奈川県田名村（現、相模原市）に4万5千粒（6万粒の新聞記事もある）、愛知県宮田村（現、江南市宮田）に3万5千粒、神奈川県西多摩郡柚木村（現、東京都青梅市油木町3丁目）に6万粒を割り当てている。新規にもうけた田名村の養魚場は相模川への放流を意図したものであり、柚木村及び白子の養魚場には、成魚まで育てるふ化事業センター機能を期待している。このように、東京周辺の3大河川での実施は、サケの天然遡上限界を知った上で、新たなサケ遡上河川の開拓を意図したことが垣間見られる。まさに、明治時代という熱量の最も高い時代ならではの選択であった。す。

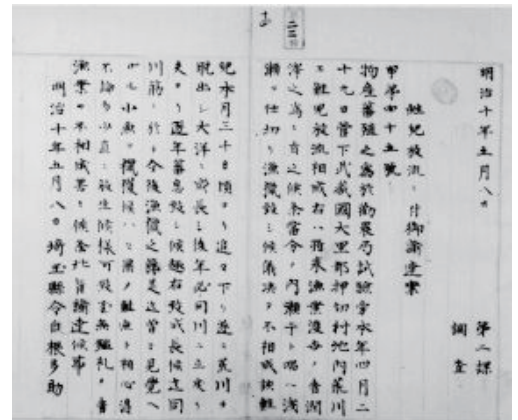
## 放流以降・荒川

このサケの人工ふ化・放流事業に伴って、稚魚捕獲禁止の諭達が荒川・多摩川が流れる府・県から出されている。埼玉県では、県令白根多助の名前で1877（明治10）年5月8日付け、東京府では5月16日付け、神奈川県では5月30日付けでそれぞれ出されている。内容を要約すれば「日本の水産業の繁栄を願ってサケの稚魚を放流したので、全員、どのような理由であってもサケの稚魚を捕ってはならない」といったことである。ここで、「今までに見たこともないような魚（鮭の稚魚）」といていることに注目するならば、明治初期における多摩川・荒川でのサケの天然産卵はなかったことを物語ってはいまいか。

サケの人工ふ化・放流事業の先鞭をつけた荒川のその後であるが、押切の養魚場は、1880（明治13）年には、三面川で採卵した5万粒、千曲川で採卵した6万粒計11万粒を養育しているにもかかわらず翌（明治14）年度の放流を最後に閉鎖された。理由は、「荒川での事業は、数年放流を継続した後、回帰の状況を見るためだけに行った試験的なもの」としてある。

さて、その結果はと言うと、1880（明治13）年10月28日に現在の秩父市寺尾地先で1尾、1882（明治15）年12月5日に現熊谷市久下地先の荒川において1尾捕獲されたとの報告が1883（明治16）年にまとめられた埼玉県内の水産概況の中にあるのみである。

1883（明治16）年には、第1回水産博覧会が上野の森で開かれた。埼玉からは、荒川で捕獲した鮭の剥製が出品されているが、前年末に久下地先で捕獲された鮭や如何。いずれにしても、日本における水産史のみならず博物館発達史に残るこの「サケの須介」を見てみたいものである。



明治10年埼玉県が出したサケの稚魚捕獲の諭達

(昨)

※参考文献として、和田穎太著「鮭と鯨と日本人～関沢明清の生涯」成山堂書店ほかを用いた。



## “鉄砲堰ってなんだ” その後

さいたま川の博物館では、大自然の中で川の地形と水の力を巧みに利用した先人の知恵の一つを紹介するために、平成10年3月28日から5月5日まで、特別展鉄砲堰ってなんだ～かつて荒川に木組みのダムがあった～を企画し、山奥からの木材搬出法である鉄砲堰のルーツとその伝播経路、木材流送技術等について紹介しました。

特別展の内容はやや専門的でしたが、林業関係者や河川史・林政史研究者等から多くの反響があり、さまざまな情報が寄せられました。

そこで、特別展は終了しましたが、各地から寄せられた貴重な鉄砲堰の情報を紹介し、特別展の補足とする次第です。

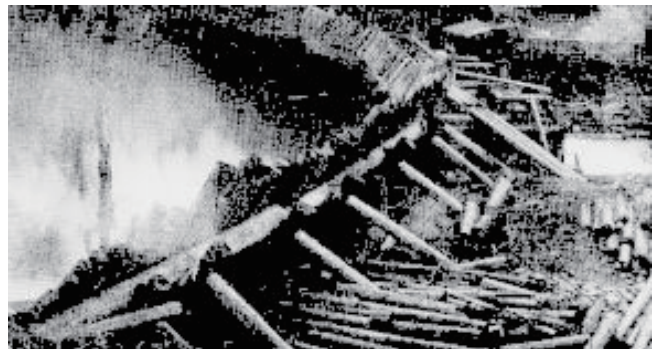
### 1. 中津川の人々が伝えた鉄砲堰

埼玉県大滝村中津川の鉄砲堰は、静岡県大井川で働く流送技術者によって大正時代から昭和初期に伝えられました。

鉄砲堰の形には、“秋田式”と“越中式”がありますが、中津川に伝えられる過程で、二つの要素が混合し、中津川型とも呼べる改良型が考案されました。この鉄砲堰と技術は、中津川の人々によって埼玉県神泉村や群馬県上野村に昭和20年代に伝えられました。

神泉村阿久原の福島久さん(昭和9年生)は、昭和20年代後半の若衆の頃に利根川水系の神流川上流で鉄砲堰を組み、木材を流送したといいます。その技術は中津川の人々から伝授されたものといいます。

中津川の人々は昭和20年代後半まで神泉村や群馬県上野村で、中津川型の秋田式や越中式の鉄砲堰を築き、木材を神流川本流に流送していたといいます。



写真① ビリベツ川本流に築かれた秋田式鉄砲堰  
(昭和25年4月撮影)。1日に2回程放水したという。



写真② ビリベツ川本流に築かれた秋田式鉄砲堰  
(昭和25年4月撮影)。放水口の板を止めておく大坊主と呼ぶ木材が2本造られている。

## 2. 北海道から鉄砲堰の便り

平成10年4月7日付けで、北海道の新聞社・苫小牧民報社編集局の新沼友啓記者から鉄砲堰の写真をいただきました。

写真は北海道町を流れる十勝川水系ビリベツ川（美里別川）本流及び支流のホロカビリベツ川の鉄砲堰写真や木材流送写真です。この写真によると鉄砲堰の木材の組み方は、秋田式のものに築かれています。

この経緯は当館職員が北海道の鶴川の鉄砲堰が掲載されている『清流鶴川』（1997年苫小牧民報社発行）を求めたことに始まります。

新沼さんは7,8年前から北海道鶴川の本木流送について調査を進め、北海道開拓と木材伐採の歴史を記事にまとめたといひます。その過程で鉄砲堰について調査を進め、当館の特別展の内容を記事にしたのです。

鶴川やビリベツ川流域の木材流送は、大正時代から昭和40年代始めまで盛んであったといひ、流送技術者は、富山県庄川町周辺の人々が多かったといひます。なかには北海道に永住して働いた人、樺太（サハリン）や朝鮮民主主義共和国と中国の国境を流れる鴨緑江まで出稼ぎに行った人もいました（『鶴川清流』による）。

## 3. サハリンにも伝えられた鉄砲堰の記録

『樺太写真帖』（昭和35年5月発行）は、昭和9年2月発行の『樺太郷土写真帖』の復刻版です。戦前までサハリン（樺太）で生活していた上尾市中分在住の石川矢（昭和9年生）さん所有の資料です。この写真集は樺太で生を受けた人々が故郷を偲んで復刻したもので、この中に鉄砲堰が掲載されていました。

この写真によりますと、鉄砲堰は木材を縦にならべて築いているので秋田式と思われる。しかし、放水口を開く構造は水を止めている板が上からずれる越中式のようです。この鉄砲堰も改良型と思われる。写真の解説にはテッポー流し（越中堤ともいう）とありました。静岡県大井川流域を中心に“越中さん”と呼ばれて活躍していた流送技術者が伝えたものと思われる。



写真③ ホロカビリベツ川に築かれた秋田式鉄砲堰（昭和25年4月撮影）。放水した瞬間約五秒後の写真という。



写真④ サハリンの川（旧名“古丹岸川”）に築かれた鉄砲堰。木材の組み方は秋田式であるが、放水口の開け方は越中式であり、改良型と考えられる。

（丘）



# プレイリーダー紹介 II

当館のプレイリーダーは総合案内、第1展示室、アドベンチャーシアター、荒川わくわくランドなどいろいろなところで活躍しています。一言インタビューをしてみました。

## 朝比奈 愛 (埼玉県出身)

さまざまなお客様とふれあうことができるこの仕事は、毎日がとても楽しいです。ひとりでも多くのお客様の笑顔が見ることができるよう**がんばります**。

## 小林 利恵子 (埼玉県出身)

私はこの博物館で川について色々なことを知りました。これからはたくさんの人達に知ってもらいたいです。

## 細瀨 寿絵 (群馬県出身)

川の情報がたくさんつまっている「かわはく」は、まさにウォーターランド。たくさんのお客様に楽しんでいただけるように頑張ります。

## 盛合 あかね (神奈川県出身)

来館されたお客様が「今日は楽しかったね」と家に帰ってから話してくれるような素敵な時間を過ごせるように接していきたい。

## 富岡 尚美 (埼玉県出身)

水を大切にしよう!川を身近に感じながら生きていこうと思いました。



## ■8月 ー夏は「かわはく」が一番！ー

7月18日から 8月30日まで 平成10年度第1回特別展

### 川の旅びと・鮭

#### 2日 ワークショップ「鮭のオースケがやってくる」

サケ科の魚にさわってみよう！

午前10時30分～/午後3時30分～ 各回30人 1時間

#### 23日 講演会「鮭の民族誌」

講師 大塚和義氏(国立民族学博物館)

荒川と北太平洋を結ぶ儀礼習俗についての講演

午後3時30分～ 定員90名

#### 29日 川辺の交流イベント

ラフティングボート体験、利き水、和太鼓や大ジグソーパズルなど夏休み最後の土曜日をお楽しみください。

## ■9月

#### 12日 土曜おもしろ博物館「音楽噴水にチャレンジ」

どんな、メロディができるかな？みんなでチャレンジ！

会場：噴水広場

#### 20日 シネマかわはく 今月は2本上映！

##### 「那須疎水物語」(20分)

那須野が原開拓を实らせた疎水を遠くから引く難工事にまつわる開拓村の血と汗と涙の物語

##### 「それ行けコロリン2」(34分)

オアシス星からやってきたコロリンとその友達の江古ろじ太が「地球にやさしく」するためのヒントを紹介

#### 27日 カワシロウ講座「川合玉堂の人と芸術」 講師 川合三男氏(玉堂美術館長)

日本の自然と心を描いた気品のある作風とその人柄、当館大陶板画川合玉堂作「行く春」も紹介

## ■10月

#### 4日 野外教室「荒川を歩くI」

玉淀河原から長瀬町樋口までの荒川観察

寄居駅南口集合 定員50名 参加料100円(保険料)

#### 10日 土曜おもしろ博物館「水車小屋で粉ひき」

移築復元した水車で実際に粉をひいてみます。

#### 18日 シネマかわはく「風ものがたり」(58分)

「食と農と環境」を総合的に考え、日々の暮らしの視点から21世紀を生きる哲学を探る記録映画

■11月

■11月14日（県民の日）は、全ての施設無料、荒川わくわくランドとアドベンチャーシアターは、整理券を配布し、整理券を持っている方のみご利用できます。

15日 シネマかわはく「あらかわ」（80分）

川をはじめとした自然にどう向き合っていくべきなのか、山や海に生きる者たちの肉声を記録

22日 カワシロウ講座「荒川の水生昆虫」 講師 大熊光治氏(県立北教育センター)

環境要素の変化に富む荒川を水生昆虫をとおして紹介

！原則として、毎月第2土曜日は「土曜おもしろ博物館」・第3日曜日は「シネマかわはく（映画会）」、奇数月の第4日曜日は「カワシロウ講座」が開かれます。料金はどれも無料で、定員になりしだい締め切ります。

インターネットでも情報が紹介されています！

<http://www.kumagaya.or.jp/~kawahaku>

【お願い】

1. 行事は都合により変更になることもあります。
2. 〒のついた行事は、電話もしくは、F a x で実施月の1日からお申し込みください。
3. 川の情報もお寄せください。

■表紙の解説■

表紙の写真は、10月1024日（土）～11月29日（日）まで開催される平成10年度第2回特別展「水のデザイン」～うすまう縄文 流れる弥生～ に出品予定の流水紋銅鐸です。本特別展では、縄文・弥生時代の造形美を中心にご紹介いたします。みなさんにはこの銅鐸の文様が、水の流れに見えますか？

編集発行

さいたま川の博物館

〒369-1217 埼玉県大里郡寄居町大字小園39

TEL 0485-81-7333/FAX 0485-81-7332

1998年8月1日発行